

ひょうご 水百景

No.151 野中の清水（神戸市西区岩岡町野中）

～播州十水の第一にして世々これを賞す～



写真-1 「史跡 野中の清水湧水処」(令和4年4月撮影)

■ 『播磨十水』のひとつ「野中の清水」

瀬戸川の右支川・清水川の上流、神戸市西区岩岡町野中にある「野中の清水」は、播磨一の豪族・赤松則村（円心）から七代目の赤松義村が定めた「播磨十水^{*1}」のひとつで、どんな日照り続きの時も清水が湧き出ていたそうです。

現在の「野中の清水」は、神戸市が平成8（1996）年に地元の人たちの要望を踏まえ「野中の清水市民公園」として整備するとともに、近くを流れる清水からポンプにより揚水して古（いにしえ）の清水を復元しています。

その清水横に建つ立礼には、平安時代前期の勅撰和歌集『古今和歌集』（紀貫之撰）巻第一七・雑歌上に詠まれた和歌「いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む」（詠み人知らず）とともに、以下のことが記されています。



写真-2 池畔に建つ「銘碑」(左)と「野中清水浚渫記」碑

「野中清水は我が国の五清水の一つで、野中下村という小村に在り、琵琶の形に似て水は澄みきり仁徳帝のときこの水で難病を癒やしたという。千年の年が過ぎ土石に埋もれていたものを大正天皇即位の年に岩岡郷土の先達集い久しく浚渫し後世に伝える。」と記されていて、「野中の清水」は5世紀の頃にはすでに知られていたようです。

公園内には、「野中の清水」と刻まれた銘碑や、岩岡小学校の校長だった岡部文太郎が、「野中の清水」の由来などを詳しく記した「野中清水浚渫記」碑（いずれも大正4年11月建立）が建てられています（写真-2）。

※1 播磨十水：室町時代後期の播磨の守護大名・赤松義村が定めたと言われる播磨国内の清水。ただ、『播磨鑑』を編纂した平野庸脩によると、十水といわれているのは4代後の赤松則房が書いた『雑談聞書』に記されているもので、義村が書いたもの（『秘事枕』）には、十水といいながら7ヶ所しか記されていない。（『ひょうご水百景』No.15 参照）

■ 古文獻に見る「野中の清水」

① 『中国行程記』

萩藩絵図師の有馬喜惣太が明和2（1765）年に作製した『中国行程記』は、萩から江戸までの長大な参勤交代路を描いた街道絵図の傑作で、この中に「野中の清水」のことが概ね以下のように描かれています。

姫路藩領から明石藩領に入り、東に向かって野原の中の街道を進むと、清水新田村に着く。村の北に帝釈堂があり、外れには茶店がある。小さい川（清水川）を越えると一里山（塚）があり、さらに川幅十二間（≒22m）の清水河原（瀬戸川）を越えると清水村である。

この川の説明として、「此川上ハ野中村より落来ル 此所迄壱里野中ト云ウハ住古此所ニ酒涌出、亦今此所ノ清水ヲ以テ明石領主之酒作ル」とあります。明石藩主・松平直明は、元禄3（1690）年に湧水処を浚渫して、この水を茶事に使い、同じ頃、大和屋忠左衛門という酒造家はこの水を使って酒を造ったといわれています。

② 『播州名所巡覧図絵』

この書物は、文化元（1804）年に村上石田（せきてん）著・中井藍江（らんこう）画により刊行されたもので、大坂から赤穂までの地名や旧跡の由来を書いた旅行案内です。名所には和歌や古典などが紹介されています。

写真-4 は、野中自治会が公園に建てた説明板を撮影したもので、左側の絵「野中の清水 夜啼松（よなきまつ）」は『播州名所巡覧図絵』から引用しています。



写真-3 「野中の清水」復元施設と立札



写真-4 「野中の清水市民公園」に建てられた「野中の清水」説明板

写真-4 の絵には、大きな松の傍らで子供連れの夫婦が「野中の清水」から水を汲み、松の皮を剥いている姿が描かれています。この清水の周辺は見事な松林だったようで、祖父松、祖母松、夜啼松という名松があり、中でも夜啼松の樹皮を削り煎じて幼児に飲ませると夜啼きがやむといわれていました。絵の前段には以下のような説明が記されています。

「驛道（旧山陽道）、清水村（現・明石市魚住町清水）より二十四、五丁（≒2.6~2.7km）、東北、野中村に森あり。林の中三間（≒5.5m）許（ばかり）、琵琶の形に残りて、今も湧き出て清水川へ流れ、海に達す。是（これ）、播州十水の第一にして、世々これを賞す。」

続けて、十水について以下のように記されています。

「城主赤松上総介則房、雑談に十水定めし條、小野江清水、笹井清水（篠井乃清水）、星田苔清水（岡田苔清水）、花垣清水、小野清水（小柳清水）、御所清水、櫻井清水、野中清水、井口清水、落葉清水」（括弧内は『Wikipedia』による）

さらに「当国十水の事は名水に絶へたる事に候へば、其村の長、心を付、みたりに汲みとらせまじき事也、水守に日毎に一升の扶助し給ふ米等、年毎に十俵を取らせ三人宛可申付所也」とのお達しが文亀 3（1503）年 2 月、志水甲斐守から出されています。

■ 伝説に見る「野中の清水」

平安時代の初め、第 50 代桓武天皇の頃のことである。美作守（みまさかのかみ）泰下丸という人がいた。彼は備前守になって京から任国へと赴く途中、播磨・印南野のここの野中に立ち寄った。そして、この清水を飲み、ひと休みしたのである。「何と清らかでおいしい水だろう」彼は旅の途中、ここで飲んだ水の味を長い間忘れることができなかった。

その後、幾年かして泰下丸は京に上った。ところが、まもなく病気にかかって寝ついてしまったのである。苦しい病の床で、泰下丸は「私は昔、備前の国への旅の途中、印南野の野中で飲んだ清水の味を忘れることができない。今、あの水をもう一度飲めば、病もすっきりして治るような気がする」と周囲の人々に語った。

早速京の都から、この野中へ水を汲みに行く使者が送られた。使いの者は、はるばるここまでやってきて、冷たい清水を汲んで都へ戻った。病床の泰下丸のもとにこの水が届けられたとき、周囲のある人が言った。「清水というが、長い旅で生ぬるい水になってしまいましたよ」それを聞いた泰下丸は、「いやいや、それでも元はあのおいしい清水じゃ。ともかく飲ませてもらおう」と、その水を飲み干した。すると、たちまち病気は治り、気分は晴れ晴れとした。そこで、彼は下記のような和歌を詠んだという。

いにしへの 野中の清水ぬるけれど もとの心を知る人ぞ汲む

上記伝説は、『神戸の伝説』に収録されている「野中の清水」にまつわる話です。

泰下丸は、おそらく古代山陽道（以下「山陽道」という）を通して備前に向かっていたと思われますが、「野中の清水」は山陽道沿いにあるわけではありません。山陽道が清水川を渡るところから「野中の清水」までは約 3km あります。それでもあえて行くほど喉が渇いていたのかも。喉をしっかりと潤して、竹筒あるいはひょうたん（今の水筒）に清水をたっぷり入れて再び馬に乗って山陽道を西に駆けて行ったのでしょうか（平安時代初期の話なので、その頃は「駅家」が整備されていた）。

「古くなった野中の清水は水もぬるくなっているが、昔のことを知っている人はいまも汲みに来てくれる」というのがこの歌の表の解釈らしいのですが、この歌は『古今和歌集』に「詠み人知らず」として収録されているものです。

山陽道が瀬戸川を渡るところに西福寺（さいふくじ）があり、その前に道標（写真-5）が残っていて、そこには以下のように記されています。

正 面：是れよりはりま名所道

左側面：左別府手枕松をのへのかね 高砂相生松道

裏 面：右岩岡あかし道

と刻まれています。



写真-5 西福寺前の道標

当時の旅人は、「岩岡・明石道」を通して「野中の清水」まで行き喉を潤したのかも。



図-1 「野中の清水」周辺の地図

■ 多くの歌に詠まれた「野中の清水」

昔見し野中の清水かはらねば わが影をもや思ひ出づらむ

『山家集』から

西行は、『山家集』に播磨書写へ行く途中で「野中の清水」に寄ったという詞書き(ことばがき)がある。この歌から、西行は二度もこの地を訪れていることが分かる。

今はとも 思ひなたえそ 野中なる 水のながれは 行きてたづねむ

『新古今集』から

大中臣輔親(おおなかとみのすけちか)：平安時代中期の公卿・歌人。中古三十六歌仙の一人。

汲みみてし 心ひとつをしるべにて 野中の清水 忘れやはする

源 国信(みなもとくにぎね)：平安時代後期の公卿・歌人。

このほかにも『後撰和歌集』に「詠み人知らず」の歌が2首あり、多くの歌人が「野中の清水」を詠んでいます。筆者は全く歌心(うたごころ)がないので、上記の歌の意味がよくわかりません。解釈は読者の皆様にお任せします。

なお、和歌山県田辺市中辺路町にも「野中の清水」があり、古来より一度も枯れたことがなく、熊野詣に訪れる人々の喉を潤してきた湧水で、「日本の名水百選」に選ばれています。『名水百選』のホームページにおける「野中の清水の由来・歴史」の中で、古今和歌集の詠み人知らずの歌(「いにしへの野中の清水……」)は、こちらの清水を歌ったものとして紹介されています。西行の『山家集』のような詞書きがあれば、和歌を詠んだ地が特定できるのですが、これらの歌だけではいずれの清水か判別は難しいようです。

■ モノローグ

『発明発見物語全集 16』によると、平安時代には、「人々の通る道筋には木を植え、旅人が休息をとれるようにせよ。水のないところには井戸を掘れ」という法律ができ、街道筋には旅人と馬の水飲み場がつくられ、旅行がしやすくなったとか。今の時代は、喉が渴けばコンビニや自動販売機があって、飲み水に苦労することはほぼありませんが、昔は湧水がとても貴重だったのでしょう。

ところで、国土地理院の地図に間違いを発見しました。瀬戸川の支川・清水川を瀬戸川としています。これが気になって、「野中の清水」の北を流れる清水川に架かる庄太夫橋、上清水橋、一文字橋、上村橋の親柱を見ると名板には「瀬戸川」の文字が。さらに寛政池に流入する川に架かる平荘大久保線・前山橋の親柱には「清水川」の名板があり、そこから南へ行った瀬戸川に架かる第一印籠橋の名板には「印籠川」の文字がありました。

不安になって、令和2（2020）年10月末に瀬戸川改修工事に伴う架け替え工事が完成したばかりの国道2号・幣塚橋（ぬさづかばし）の親柱を見ると、「瀬戸川」と記されていて一安心（なお、昭和6年12月竣工の国道2号・帝釋橋には河川名表示なし）。

下流の明石市域は二級河川なので問題ないようですが、上流の神戸市域はいずれも普通河川になっていて、河川名がぐちゃぐちゃになっているようです。



写真-6 「野中の清水」近くを流れる清水川

スイセン（水仙）

ヒガンバナ科スイセン属の多年草。この水仙の副花冠は白色。スイセンという名は、漢名の「水仙」を音読みしたもので、「仙人は、天にあるを天仙、地にあるを地仙、水にあるを水仙」という中国の古典に由来する。水辺に育ち、仙人のように寿命が長く、清らかという意味から名付けられたとされる。別名に雪中花、雅客。多年草で、冬から春にかけて白や黄の花を咲かせるものが多い。全体に有毒である。「野中の清水」近くを流れる清水川の土手に咲いていた。



写真-7 清水川の土手に咲いていたスイセン

【参考資料】

- 1 『加古川市史第一巻 本編Ⅰ』 加古川市 平成元年3月
- 2 『播州名所巡覧図絵』 村上石田著・中井藍江画 文化元年
- 3 『神戸の伝説』 田辺真人 平成23年6月
- 4 『播磨の街道～「中国行程記」を歩く』 橋川真一 平成16年1月
- 5 『糸の井・桜井の清水と播磨十水』 太子町HP「歴史資料館」
<https://www.town.hyogo-taishi.lg.jp/soshikikarasagasu/rekisisiryo/furusato/1460879759375.html>
- 6 『神出むかし物語』 藤井昭三 平成16年3月
- 7 『野中の清水』 「すさまじきもの～「歌枕」ゆかりの地★探訪～」HP
<https://saigyo.sakura.ne.jp/framepage2.html>
- 8 『発明発見物語全集 16～1 章 上水道と人間のくらし』 藤田千枝編 国土社 昭和60年
- 9 『桓武天皇、松平直明、播磨十水、大中臣輔親、源国信、スイセン属』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

※発行：令和4（2022）年6月 『ひょうご水百景』No.151

改訂：令和8（2026）年7月 『ひょうご水百景』No.151